

北部地区医師会主催 平敷淳子国際女医会会長講演会

～女性医師が活躍するために大切なこと～

北部地区医師会 石川 清和



医療崩壊が全国的な問題になってきているが、北部地区では県立病院の産婦人科休止による手術の必要な産婦の中部への搬送、小児科外来の縮小など医師不足による外来の縮小は数年前から問題になっている。循環器の医師の確保、今後の医師を確保し医療を再生するためには真剣に取り組まなければならない。女医の活用もその一つであり、今回北部地区に縁のある国際女医会の会長平敷淳子先生をお招きし、女性医師が活躍してもらうために何が必要か？ということと講演していただいた。

講演タイトル

「生涯輝いて働いていける女性医師のために」
平敷淳子国際女医会会長



講演主旨

女性医師の歴史はわずか100年強である。女性が医学生として公的、私的な教育をうける場を探し出すことから始まり、公的に国家試験を受け、医師として認知されるにいたる経緯には、女性自身による計り知れない努力があった。忍耐と戦いの歴史。戦い抜いて、まずは自分が医師となった先人、女性のための教育の場を創立するに至った先人の歩みを思うとき、恵まれすぎている現在から後退だけはさせたくないと思っている。

教育の機会均等が当たり前の時代に学び、1995年の北京宣言以来わが国においても、男女雇用機会均等、男女共同参画があらゆる場で

平敷淳子国際女医会会長プロフィール

1964	東京女子医科大学卒業
1964～1966	立川米国空軍病院およびノースウエスタン大学エヴァンストン病院でインターン
1966～1970	ジョンズ・ホプキンス病院放射線科、レジデント
1970～1972	群馬大学医学部放射線医学教室
1972～1974	ジョンズ・ホプキンス病院放射線科 Assistant Professor
1974～1987	群馬大学医学部放射線医学 助教授
1987～2006	埼玉医科大学放射線医学 主任教授
その他	鳥取大学医学部・東京女子医科大学、などで教鞭を取る。
現在	埼玉医科大学名誉教授 国際女医会会長 鳥取大学客員教授
1986	日本女医会吉岡弥生賞
2003	国際磁気共鳴医学会 fellow
2006	第1回埼玉輝き荻野吟子賞
2006	ドイツ放射線医学会名誉会員

叫ばれている。この時代であるから、「女性医師」の名の下に甘えはゆるされないと思う。

性別による差別なく、国から教育の援助を受け、国家試験によって医師免許書が授与された医師は、それこそ性別を問わず生涯働き続けていくことが当たり前のこと。女性男性を問わず、医師としての生き方は医学生のと時から培い、いかに人生いきるかという個人の哲学をもっていかなければならないと思う。その背後をささえる mentor や指導者との出会い、働く環境について、若い女性医師への提言をしたい。

医療に従事しているものにとって、決して削ることのできない「医療の質」や医師が生涯持ち続けなければならない医学的な知識の「competence」が故に、数学的に解決できない問題があるのでしょう。

どうしたら、生涯輝いてはたけらけるでしょう。女性医師だけで解決できるも問題ではなく、社会、環境、生活全般の意識改革が最重要課題と思います。

平敷淳子国際女医会会長講演記

7月末にあわだだしく講演会開催を決定し、広報不足が否めない状況であったが、事務局、医師会の諸先生方の尽力で当日は会場になった出雲殿には約100名の参加者があった。

平敷先生の講演は一生働きたいという強い意志が必要であると述べ、医学部生、医師の早い段階で良きMentorかrole modelとの出会いが大切である強調された。女性医師の近年の国家試験合格率は33～32%で推移しており、30代の女医の就業率は60%台で若い女医の比率の多い産婦人科では今後医師不足が加速され

る可能性がある。2003年の日本女医会のアンケート調査では女医の休職の最大の理由は育児であり、働きたいけど働けない現実がある。またキャリア形成の疎外因子として育児、妊娠、出産、子供の教育が挙げられているが、本当にキャリアアップしたいなら勉強時間の工夫が必要である。

平敷先生はご自身の国際女医会長までキャリアアップした軌跡を振り返り

1. ありたい自分、あるべき自分を学生の頃から描き
 2. 手広くせず、種々選択し自分のすべき事に集中し
 3. 自分を信じ、自分が変わることで回りを変える思いで一步前に進むこと
 4. 孤立せずに良きMentor・role modelを見つけること
- が大切であると述べられた。

最後に平敷先生の師の西澤潤一郎首都大学東京総長の「相互理解は違いの必然性の認識から」との言葉を紹介されて講演を締めくくられた。

～平敷淳子国際女医会会長講演会に参加して～



金武診療所 高良 和代

北部地区医師会の主催で女性医師の活用を目的とした講演会が8月21日(木)講師には国際女医会会長の平敷敦子先生をお招きし「生涯輝いて働ける女性医師のために」を演題とし、講演会が催されました。

講演では、女性医師が生涯輝いて働き続ける為には、医学部入学当初より生涯のシナリオを持ち、良きメンター(指導者・助言者のような意味だが少しニュアンスが違う)良きロールモ

デルとの出会いが重要であること、漠然と勉強しているだけではなく、モチベーションと高い知識の裏づけが必要であること。又、どうしても良いことにはあまりこだわらず、自分のやりたいことに専念すること、一步踏み出すために、自分を信じて歩み、体制は自分では変えられないので、置かれた環境の中で一生懸命働けば自ずと道は開かれると説かれました。

孤立しないこと、働きたいけれど働けない状

況に置かれている女性医師に手を差し伸べる
ことが大事である。今はパートでしか働けな
いけれど、いずれはきちんと働いてほしい。

海外の状況としては他国でも女医が増加
しているのは日本と同じであるが、三十代
の女性医師就業率では、スウェーデン85%
、アメリカ72.5%、ドイツ60%、日本60%
、韓国50%であり、タイやフィリピンでは
医師は特権階級であり、仕事を一生続け
られる環境にある人しか、医師にならな
いとのことであった。家政婦を17名程度
雇える状態とのことである。日本では女
性医師の56%が休職しており、労働人
口として極めて不利益である。育児施設
の充実、労働条件の明確化等を望む声
が大きい。

自分がどうありたいか、どうあろうと
いう哲学が基本で、個々に応じた生き方
、経済状況が許されるのなら家事代行
、ベビーシッター等利用し、決して今
の状況に甘えることなく生涯働

き続けてほしい。「相互理解は必然性
の違いから」との言葉で締めくくられ
ました。

先生自体女医会会長の任期はあと一
年半で、その後はドイツにて再度研
究生活に入られるとのことで、生涯
医師として働き続けることをモ
ットーに頑張られております。私
事ではありますが、出身大学の女
医会に参加しても独身と子供無
の医師は続けておられますが、
育児にて休職している後輩が、
「もう離れていると恐ろしくて
患者を診れません」とつぶや
いていました。こういう女性
医師が再教育プログラム等利
用して復帰出来ることは労働
力の上でかなり重要であると思
われます。現在、女性医師の
活用が声高に叫ばれ、以前より
現場復帰しやすい環境が徐々
に整いつつあります。「勇気
を持って一歩踏み出して欲しい
・甘えるな」ととても強く
また励まされる言葉でした。

